

日本における友人間の 「ほめ」に関する研究の概観

青木直子

A review of studies on praise between friends in Japan

Naoko Aoki

Abstract

The focus of this study is to review the existing literature on praise between friends in Japan and discuss future research. Past studies focused on parents, teachers, and experimenters as persons who provided praise, while children were regarded as persons who received praise. There were differences between providers and receivers, such as age, status, and experiences. However, friends who are in a similar situation could be providers of praise. Through the literature review, it was found that many studies focused on elementary school students; however, no study has focused on preschoolers, and adults, including middle-age and older adults. The most popular methods in past studies on praise between friends were practical studies of activities that included students in the classroom recognizing and acknowledging their friends' good behaviors, which was termed as PPR (Positive Peer Reporting), while there were few studies that reported people's praise between friends in natural settings. Thus, it is necessary to expand the participants' age group because friendship is a familiar relationship in all developmental stages. The results also emphasize the importance of gathering data in natural settings, as praise between friends in daily life is not clear. In addition, knowledge of praise between friends in daily life will help teachers improve activities to make them more realistic.

問題と目的

言語的・非言語的フィードバックによって友人をほめる、あるいは、これらのフィードバックを友人から受け取るという友人間の「ほめ」は、さまざまな発達段階においてみられるものである。たとえば、5歳児の劇遊びを取り上げた研究では、子どもたちがうまく演じることができた友人に拍手をしたり、「すごい」とほめる様子が報告され

ている(藤塚, 2019)。また、幼児は、友人からほめられるだけでなく、ほめてくれた友人のことをほめ返したり、友人に「これどう?これいい?」と自分の取り組んでいることについて評価を求めるところもある(Hatch, 1988)。

幼児と同様に、小学生も友人のことをほめ、友人からほめられている。小学校における実践研究からは、アサガオの観察記録を見せ合いながら、友人の観察記録を「本物そっくりだね」とほ

所属:

藤女子大学人間生活学部子ども教育学科

Department of Child Education, Faculty of Human Life Science, Fuji Women's University

めたり（奥村，2010），展覧会に展示されたクラスメイトの作品について「さすが〇〇くん」と日記に感想を記述するなど（山室・小野・草野・中窪，2006），小学生がさまざまな場面で友人をほめている様子をうかがうことができる。また，小学4年生に対し，友達からほめられたり，認められていると感じるかについてたずねた調査では，83.3%が「そう思う」と回答しており（竹内・遠藤・志藤・大橋・佐々木・安川，2019），友人をほめ，友人からほめられることは，小学生にとって日常的なことといえる。

青年期以降においても，友人間の「ほめ」はよく行われている。たとえば，中学生を対象とした特別活動の指導に関する研究では，77%の生徒が友人からほめられたことがあると回答している（高橋，2015）。また，女子高校生に対し，3ヶ月以内に友人にほめられた経験の有無をたずねた調査では，「よくあった」という回答が31.2%，「ときどきあった」という回答が62.4%であった（上長・大元・中島・篠原・網谷・津上，2014）。大学生も，もっとも親しい同性の友人についてたずねたインタビューにおいて，「その友人は自分のことをほめ，よいところを評価してくれる人物である」という語りが見られるなど（渡辺，2010），友人のことをほめ，友人からほめられていることがうかがえる。

このように，友人間のほめる・ほめられるというコミュニケーションは，さまざまな発達段階において行われている。「ほめ」は，大人と子ども，先輩と後輩，上司と部下など，年齢・経験・地位などが異なる関係性においてだけでなく，同じ年齢・立場である友人関係においてもやりとりされているのである。

しかし，従来の「ほめ」に関する研究では，仲間関係における「ほめ」や対等な立場にいる友人間の「ほめ」が取り上げられることは少なかった（平野，2019；小島，2013）。これまでの研究では，主に，保護者・保育者・教師・実験者から子どもへの「ほめ」が検討されてきたのである。だが，友人間の「ほめ」は，「ほめ」について解明する上で注目すべき点も多い。

友人間の「ほめ」に注目すべき理由

さまざまな側面への影響が予想されること 友人との間でやりとりされる「ほめ」を取り上げたいくつかの研究からは，保護者などからの「ほめ」と同様，友人間の「ほめ」も人々にさまざまな影響

をもたらしていることがうかがえる。このことは，友人間の「ほめ」に注目すべき第一の理由である。

たとえば，5歳児クラス内のあるグループに注目し，話し合いや活動への取り組み方を観察した研究では，子どもたちが友人から承認されることによって自信を深め，活動に対し，積極的に取り組むようになった様子が報告されている（吉村・上田，2017）。また，小学校での音楽の授業実践でも，友人のよい表現を見ることで「自分もできるようにになりたい」など，活動に対する動機づけが高まる様子がみられたという（山上，2007）。大学生を対象とした研究においても，友人からほめられることが動機づけの向上につながることで指摘されており，受講生同士でお互いの演奏のよい点や改善点を口頭で伝える相互評価活動を行った研究では，実施後に「ほめられるとやる気になる」という記述が多くみられている（坂本，2013）。また，まだ逆上がりのできない5歳児が逆上がりのできる友人のことを「すごい」とほめ，自分も逆上がりに挑戦するようになるなど（石倉・竹田・岩城・水島・横田，2019），友人の優れた点をほめることによって，ほめた側の動機づけが高まることもある。

友人間でやりとりされる「ほめ」は，自尊感情や被信頼感など，感情面にも影響を与えている。自尊感情については，小・中学生を対象とした調査において，友人からほめられる頻度と自尊感情の間に正の相関がみられることが指摘されている（渡辺・藤井，2020）。また，被信頼感については，中学1～3年生がクラスメイトのがんばりをカードに書いて伝える活動に取り組むことによって「クラスメイトから頼りにされていると思う」という回答が増えることが示されている（岡田・藤亀，2007）。

友人間の「ほめ」は，対人認知にも変化をもたらす。たとえば，クラスメイトから「先生によく注意されている子ども」と認識されていた4歳児とそのクラスメイトの関わりに関する研究では，その子どもがあるクラスメイトからほめられたことをきっかけに「〇〇ができる子ども」と認識されるようになった事例が報告されている（林，2012）。さらに，友人からほめられることと対人認知との関連は，「ほめ」の条件によっても異なることが指摘されており，大学生を対象とした調査では，ほめられる際に根拠があった方がほめ手への親しみやすさが高くなることが指摘されてい

る(野崎, 2018)。

友人間の「ほめ」は、友人関係にも影響を与える。たとえば、小学5年生が友達のよいところをカードに書いて伝えるといった活動に取り組んだところ、友人関係が非侵害的なものになることや(池島・松山, 2016)、教師の評定する学級雰囲気尺度の認め合いなどの得点が高まることが指摘されている(森岡・近松・渡辺・山本, 2011)。また、中学生を対象とし、同様の活動を行ったところ、他者との関わりが少なかった中学生の他者と関わる頻度が高まったことが報告されている(Nelson, Caldarella, Young & Webb, 2008)。

新たな「ほめ」の影響が明らかになる可能性があること 友人からの「ほめ」は、保護者など立場の異なる人物からの「ほめ」とは異なる影響をもたらすことも予想される。このことも、友人間の「ほめ」を取り上げるべき理由の1つとして挙げられる。たとえば、教師からの「ほめ」は、「先生は〇〇さんのことをひいきしている」という感情を生じさせる場合がある(cf. 古関, 2007)。しかし、ほめ手が友人である場合には、こういった否定的な感情が生じにくいことや、お互いのよいところに注意を向けることで切磋琢磨する雰囲気が生まれるなどの効果があると予想される。一方で、自分と同じ程度の経験や能力を持つ友人がほめ手になることで、評価の信頼性が低下し、「ほめ」の肯定的な効果が弱まること、また、ほめる側・ほめられる側という関係が意識されるようになり、それまでの関係性が変化するということも考えられる。

友人はさまざまな発達段階においてほめ手となること 友人は、特定の発達段階だけではなく、さまざまな発達段階においてほめ手となりうる存在であることも、友人間の「ほめ」に注目すべき理由として挙げることができる。発達にともなって、ほめ手となる人物は変化していく。たとえば、幼児期から青年期にかけては、教師との関係性は比較的密接といえる。そのため、幼児・児童・生徒を調査対象とし、最近、教師からほめられたエピソードを収集することは難しくないと思われる。しかし、成人期以降、多くの人々は学校という場面から離れ、教師との関係性は希薄になる。

そのため、成人期以降の人々に対し、最近、教師からほめられたエピソードをたずねても、エピソードを収集することは困難であると思われる。一方、友人との関係性は、特定の発達段階においてのみみられるものではない。つまり、友人からの「ほめ」に注目することで、さまざまな発達段階の人々を対象とした調査が可能になり、ほめる・ほめられるというコミュニケーションの生涯発達をとらえることができるのである。

本研究の目的

これらのことから、本研究では、日本における友人間の「ほめ」を取り上げた研究について文献研究を行い、研究の動向について整理する。また、先行研究の問題点をふまえ、今後の友人間の「ほめ」の研究のあり方について考察する。

方法

国立情報学研究所のCiNiiを用いて、文献検索を行った。用いた検索キーワードは、「友達・友だち・友人・親友・クラスメイト・級友」のいずれかを含み、かつ、「ほめ・褒め・誉め・賞賛・称賛・承認・認める・認め合い・認め合う」のいずれかを含むもの(検索1)、「友達・友だち・友人・親友・クラスメイト・級友」のいずれかを含み、かつ、「よさ・良さ・よいところ・良いところ・よい所・良い所・よい点・よかったところ・よかった所」のいずれかを含むもの(検索2)である。なお、検索1は、2019年12月27日、検索2は2020年1月2日に行った。

検索1では、175件の論文が該当した。このうち、重複する10件、文献研究2件、「ほめ」について扱っていない85件、賞賛欲求や承認欲求などを測定したり、それぞれの重要性について述べているが、「ほめ」の頻度やエピソードについてたずねていない21件、教師や保護者からほめられたエピソードなど、友人間のほめを取り上げていない30件は、分析の対象から除外し、27件を分析の対象とした¹⁾。また、検索2では、97件の論文が該当した。このうち、検索1にも含まれていた5件、検索2で重複した4件、文献研究1件、「ほめ」について扱っていない60件、友人間の「ほ

¹⁾ 検索の際のキーワードとして「承認」を用いたため、検索結果には「調査の実施にあたって所属機関の承認を得た」などの表現を含むが、友人間の「ほめ」を取り上げていないものが多く含まれていた。

め」に言及しているが、具体的な記述のない1件、教師や保護者からほめられたエピソードなど、友人間のほめを取り上げていない9件は、分析の対象から除外し、17件を分析の対象とした²⁾。つまり、本研究で分析対象となるのは、44件の論文である。

結果と考察

研究の行われた年代

まず、それぞれの研究の発表された年代について整理する。1990年代に発表された論文は4件、2000年代に発表された論文は19件、2010年代に発表された論文は21件であった。つまり、友人間の「ほめ」に関する研究は、2000年代以降に集中しているといえる。

これは、研究者・保護者・教師などの「ほめ」全般に対する関心の高まりを反映したものと考えられる。「ほめ」に関する研究は、1960年代から行われており (e.g. Fischer, 1963; Zigler & Kanzer, 1962), それほど新しい研究分野ではない。しかし、2000年代になると、レビュー論文が出版されるなど (e.g. 青木, 2005; Henderlong & Lepper, 2002), 「ほめ」に関する研究が活発になってきた。また、2000年代以降、子どものほめ方・叱り方に関する書籍の出版数が増え (石川, 2013), 2010年代になると、育児雑誌におけるほめる子育てに関する特集が組まれることも多くなった (松島・若狭, 2020)。つまり、2000年代以降、友人からの「ほめ」に限らず、「ほめ」に関する関心が高まってきたため、友人間の「ほめ」に関する研究も多くみられるようになったといえる。

調査対象者の年齢

次に、それぞれの研究における調査対象者の年齢について整理する。もっとも多かったのは、小学生を対象とした研究 (30件) であった。30件のうち、調査対象者の学年が明記されているものが23件、学年は明記されていないが、小学生を対象としたものと判断できるものが7件であった。次に多かったものは、中学生を対象としたもの (4件) であった。その他には、高校生を対象としたもの (3件)、小学生・中学生・高校生を対象としたもの (2件)、大学生を対象としたもの (2件)、大学生・大学院生を対象としたもの (1

件)、専門学校生・短期大学生・大学生を対象としたもの (1件) があった。また、調査対象者の年齢が明記されていないものが1件あった。

文献検索の際は、調査対象者の年齢が限定される「クラスメイト・級友」といったキーワードに加え、幼児や成人を対象とした研究でも用いられる「友達・友人」といったキーワードも使用している。しかし、幼児期や成人期以降を対象とした研究は見当たらず、分析対象となった論文の68.18%が小学生を対象とした研究であることが判明した。つまり、友人間の「ほめ」に関する研究は、児童期に焦点づけたものが中心となっているといえる。

児童期は、友人との関わり方が大きく変化する時期である。たとえば、友達というテーマで書かれた作文を分析すると、小学1年生は、一緒に遊んだなど、同じ行動をしたことが書かれることが多いが、3年生になると、励ましてくれる・心配してくれるなど、心理的な支持に関する記述が増加する (松永, 2011)。また、児童期の後期になると、友人の重要度も変化する。たとえば、小学4～6年生に対し、第一～第四アタッチメント対象をたずねた研究では、学年が上がると、第一アタッチメント対象として母親が選択されることが少なくなり、第二アタッチメント対象として友人が選択されることが多くなる (村上・櫻井, 2014)。また、小学3～6年生のソーシャルサポート機能に関する研究では、4～5年生は自信を持たせてくれる人として母親や父親を選択するが、6年生になると友人が選択されるようになる (八越・永井・濱口, 2010)。

このように、児童期になると、友人との関係性がより内面的なものに変化し、友人の重要度が高まっていく。そして、友人をほめること・友人からほめられることの意味も、より大きくなると考えられる。これらのことから、対人間の「ほめ」に関する研究には、小学生を対象とした研究が多いと推測される。

調査方法

調査方法については、質問紙法によるもの・実験法によるもの・面接法によるもの・教師が設定した友人間でほめ合う活動の実践研究・自然場面

²⁾ 検索の際のキーワードとして「よさ・よいところ」などを用いたため、検索結果には「居心地のよさ」などの表現を含むが、友人間の「ほめ」を取り上げていないものが多く含まれていた。

での友人間の「ほめ」を取り上げたものの5つに分類した。友人間でほめ合う活動の実践研究には、質問紙を用いて活動前後の変化をとらえたものもあるが、それらの研究は質問紙法による研究ではなく、実践研究として分類した。

もっとも多かった調査方法は、友人間でほめ合う活動に関する実践研究であった(32件)。具体的には、普段の生活の中で気付いた友人のよいところをカードに書いてポストに投函したり(池島・松山, 2016)、帰りの会で発表する活動(福岡県北九州市立香月小学校, 2015)を取り上げたものが多かった。また、係活動(月原, 1999)、体育(小林・具志堅・嘉数・佐藤・砂川・喜屋武, 2019; 矢野・佐伯, 2018)、家庭科の作品鑑賞(赤塚, 2008)、集会活動(野中, 2008)など、特定の場面・ことごとについて、友人の優れた点を探し、伝えるという活動も行われていた。

次に多かったものは、質問紙法によるものであった(8件)。質問紙法を用いた研究の多くは、友人からほめられる頻度を測定し、その他の変数との関連を検討したものであった。友人からの「ほめ」は、学習や活動に対する動機づけ(藤原・河村, 2014; 仲埜, 2017)、教師に対する援助要請・被援助志向(永井, 2009; 田村, 2015)などとの関連が検討されることが多かった。また、友人からほめられたエピソード(関崎・金・趙, 2017)、かっこいい・かわいいと言われた相手(長山・小林・松園・鈴木・赤崎・西野・中西・財津・柳, 2006)など、友人間の「ほめ」の実態をとらえる研究もみられた。

質問紙法に次いで多かったものは、自然場面での友人間の「ほめ」を取り上げたものであった(2件)。これらの研究では、音楽や図工の授業におけるエピソードの1つとして、休み時間に友人の歌声をほめる様子や(鹿田, 1998)、日記に友人の作品のすばらしさについての記述がみられたことなど(山室・小野・草野・中窪, 2006)、自然な文脈における友人間の「ほめ」が記録されていた。

また、実験法による研究(1件)では、相手のことを実際にほめてもらう実験を行い、発話の内容の分析が行われていた(金, 2010)。面接法による研究(1件)は、家庭科の授業中のエピソードをたずねるもので、インタビューの中で友人同士でほめ合った経験が語られていた(藤田, 2015)。

友人間でやりとりされる「ほめ」に関する研究

の主流となるものは、教師の設定したほめ合う活動に関する実践研究であった。このような研究動向は、学校生活における友人関係の重要性を反映したものと見える。学校生活における友人関係は、小学生の学級適応感や(江村・大久保, 2012)、中学生の学級の居心地のよさと正の関連がみられるなど(林田・黒川・喜田, 2018)、学校生活の質を左右する要因の1つとなっている。そのため、学校場面では、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れた活動や(e.g. 江頭, 2015; 待鳥, 2018)、構成的グループエンカウンターを取り入れた活動など(e.g. 木村・荻間澤, 2013; 佐々木・菅原, 2009)、友人関係を改善し、対人関係能力を高めるためのさまざまな取り組みが行われている。友人のよいところを伝え合う活動も、良好な友人関係を築くための活動として採用されることが多いため、友人間の「ほめ」に関する研究の多くを占める結果となったと考えられる。

なお、友人同士でほめ合う活動は、日本以外においてもよく行われている(e.g. Dillon, Radley, Tingstorm, & Barry, 2019; Teerlink, Caldarella, Anderson, Richardson, & Guzman, 2017)。海外では、Peer reporting/Peer praise note/Tootlingと呼ばれるほめ合う活動は、友人間の「ほめ」の回数に応じてクラス全体に自由時間やおやつなどのごほうびが与えられるなど、日本で行われている活動とは異なる側面もあるが、友人のよい行動について報告し合うという枠組みは同じである。

調査対象者の年齢と調査方法

調査対象者の年齢と調査方法について整理するため、調査方法ごとに対象者の年齢をまとめた(Table1)。調査対象者の年齢は、小学生、中学生、高校生、小・中・高校生(小学生と中学生と高校生のすべてを対象としたもの)、大学生(専門学

Table1 調査方法と調査対象者の年齢

	小学生	中学生	高校生	小・中・高校生	大学生	不明	計
質問紙法	2	1	1	2	2	0	8
実験法	0	0	0	0	1	0	1
面接法	0	0	0	0	1	0	1
ほめ合う活動に関する実践研究	27	2	2	0	0	1	32
自然場面での「ほめ」の報告	1	1	0	0	0	0	2
計	30	4	3	2	4	1	44

校生・短期大学生・大学生・大学院生のいずれかを対象としたもの)、不明の6つに区分した。調査方法は、前項と同じく、質問紙法・実験法・面接法・ほめ合う活動に関する実践研究・自然場面でみられた「ほめ」の報告という5つの区分を使用した。

質問紙法を用いた研究は、調査対象者の年齢に偏りはみられなかった。しかし、ほめ合う活動に関する実践研究は、32件中27件が小学生を対象としたものであった。また、小学生を対象としたほめ合う活動に関する実践研究が全体の61.36%を占めており、友人間の「ほめ」に関する研究の主流は、小学校におけるほめ合い活動を取り上げたものであることが明らかになった。

今後求められる研究

日本における友人間の「ほめ」に関する研究について整理した結果、2つの問題点を指摘することができる。1点目は、小学生を対象とした研究が多く、その他の発達段階を対象とした研究が少ない点である。児童期は、友人との関わり方に変化がみられ、友人の重要度も上がっていく時期である。しかし、児童期以前の幼児も、友人と関わりを持っている。たとえば、幼児同士の関わりの有無について分析した研究では、年少児では保育者との関わりが多いが、年長になるにつれ、保育者との関わりが減少し、友人との関わりが増えることが示されている(近藤, 2017)。また、児童期以降の人々も、友人関係を築いている。たとえば、発達段階別に友人数をたずねた調査では、前成人期から老年期にかけて、友人だと思える人の数に有意差がみられないことが指摘されている(本田, 2018)。

このように、友人関係はそれぞれの発達段階においてみられるものであることから、児童期以外の発達段階においても友人間の「ほめ」がやりとりされている可能性がある。そのため、今後は、児童期以外の人々を対象とした研究を行う必要があるといえる。

2点目は、自然場面における友人間の「ほめ」に関する研究が少ないという点である。友人間の「ほめ」に関する研究の多くは、教師が設定した友人間でほめ合う活動に関する実践研究であり、教師が介入していない場面での友人間の「ほめ」の頻度・「ほめ」の対象となることがら・友人からの「ほめ」のとらえ方などは、ほとんど明らかになっていないのである。

また、自然場面での「ほめ」に注目することは、普段、友人間でやりとりされている「ほめ」を説明することだけでなく、ほめ合う活動をより適切に行うことにもつながるといえる。ほめ合う活動に関する実践研究では、友人関係が良好になるといった結果だけではなく、活動終了後、活動中に改善したほめ合う回数や友人関係が活動以前の水準に戻ることや(e.g. Cihak, Kirk, & Boon, 2009; Skinner, Neddentiep, Robinson, Ervin, & Jones, 2002)、失敗不安が高まることも報告されているが(小林ら, 2019)、このような結果に至った理由として、自然場面における友人間の「ほめ」を加味していなかったことが指摘できるからである。たとえば、ほめ合う活動が終了した後、友人間の「ほめ」が行われなくなった背景には、普段から友人のことをほめたり、友人からほめられることが少ないため、友人をほめるのは活動の場面だけでよい、あるいは、今は活動をしているので友達をほめなくてはいけないといった認識が生じていた可能性が挙げられる。また、ほめ合う活動によって失敗不安が高まった背景としては、もともと友人からの「ほめ」は「ほめられるとほめられた部分を意識しすぎてしまう」「ほめられたらまた成功させなければいけない」と受け止められやすいものであったことなどが指摘できる。もし、自然場面においてどの程度「ほめ」のやりとりが行われているのか、また、友人からほめられることをどのようにとらえているのかなどが明らかになれば、それらを考慮したほめ合う活動を進めることが可能になる。つまり、自然場面を取り上げた研究を行うことは、普段の生活における友人間の「ほめ」の実態をとらえることに加え、ほめ合う活動の改善にもつながるのである。

友人間の「ほめ」に関する研究は、保護者・保育者・教師・実験者などがほめ手となる研究と比べて、知見の積み上げが少ない。しかし、友人間の「ほめ」は、すべての人々にとって身近なコミュニケーションである。そのため、これからさまざまな研究が行われ、発展していく分野であると考えられる。そして、今後の研究では、幼児期や成人期以降など、児童期以外にも注目し、研究を進めること、自然場面における友人間の「ほめ」の様子をとらえる研究を充実させることが期待される。

引用文献

- 青木直子. (2005). ほめることに関する心理学的研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 52, 123-133.
- 赤塚美鈴. (2008). 「ありがとうカード」を用いた学習者参加型授業の実践研究 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 51, 16.
- Cihak, D. F., Kirk, E. R., & Boon, R. T. (2009). Effects of classwide positive peer "Tootling" to reduce the disruptive classroom behaviors of elementary students with and without disabilities. *Journal of Behavioral Education, 18*, 267-278.
- Dillon, M. B. M., Radley, K. C., Tingstorm, D. H., & Barry, C. T. (2019). The effects of tootling via classdojo on student behavior in elementary classrooms. *School Psychology Review, 48*, 18-30.
- 江頭雄一郎. (2015). 児童一人ひとりに居心地のよさを感じさせる学級経営支援の実践的研究－担任へのコンサルテーションと各学級へのSSTの導入を通して－ 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 5, 151-158.
- 江村早紀・大久保智生. (2012). 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, 22, 241-251.
- Fischer, W. F. (1963). Sharing in preschool children as a function of amount and type of reinforcement. *Genetic Psychology Monographs, 68*, 215-245.
- 藤田智子. (2015). 家庭科に対する「学習レバンス」の構造にみる男女共修家庭科の意義と課題 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 58, 19.
- 藤塚岳子. (2019). 幼児の協同遊びにおける共有の過程－年長児の劇遊びを通して－ 東海学園大学教育研究紀要, 3, 9-19.
- 藤原和政・河村茂雄. (2014). 高校生における学校適応とスクール・モラルとの関連－学校タイプの視点から－ カウンセリング研究, 47, 196-203.
- 福岡県北九州市立香月小学校. (2012). 相手を思いやり、共によく生きていこうとする心豊かな子ども・教師を育てる道徳教育～自分のよさを知ると共に、友達のよさを認め、互いに仲良く助け合っていこうとする心を育む総合単元的な道徳学習の試みを通して～ 上廣道徳教育賞受賞論文集, 23, 65-78.
- Hatch, J. A. (1988). Peer evaluation and competence motivation in a kindergarten classroom. *Early Child Development and Care, 34*, 15-26.
- 林悠子. (2012). 保育記録に見る保育者と子どもの関係性－子ども1人1人とクラス集団に注目して－ 佛教大学社会福祉学部論集, 8, 17-37.
- 林田美咲・黒川光流・喜田裕子. (2018). 親への愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響 教育心理学研究, 66, 127-135.
- Henderlong, J., & Lepper, M. R. (2002). The effects of praise on children's intrinsic motivation: A review and synthesis. *Psychological Bulletin, 128*, 774-795.
- 平野真理. (2019). 他者をほめること・他者からほめられることを通した自己の肯定的評価－日本人女子大学生に効果的なレジリエンス教育にむけて－ 東京家政大学研究紀要, 59, 61-70.
- 本田周二. (2018). 世代間比較による友人関係の特徴について 人間生活文化研究 (大妻女子大学), 28, 126-130.
- 池島徳大・松山康成. (2016). 学級における3つの多層支援の取り組みとその効果－PBISの導入とその検討－ 奈良教育大学教職大学院研究紀要学校教育実践研究, 8, 1-9.
- 石川真由美. (2013). 育児書・育児雑誌におけるしつけに関する考え方の分析－「叱る」「ほめる」に着目して－ 愛知教育大学幼児教育研究, 17, 29-37.
- 石倉卓子・竹田好美・岩城愛・水島志穂子・横田美咲. (2019). 認定こども園の園庭における遊びの質を考える－保育教諭がとらえた幼児の経験から－ 富山国際大学子ども育成学部紀要, 10, 1-25.
- 上長然・大元誠・中島範子・篠原一彦・網谷綾香・津上佳奈美. (2014). 高校生女子におけるライフイベントと友人関係の継続との関連 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 18, 41-48.
- 金庚芬. (2010). 日本語と韓国語の「ほめ」における男女差－親しい友人同士の会話をデータとして－ 明星大学研究紀要人文学部, 46, 83-94.
- 木村佳穂・荊間澤勇人. (2013). スクールカウンセラーによる高校新入生の学校適応への支援－構成的グループエンカウンターを活用した援助－ 学級経営心理学研究, 2, 74-83.
- 小林稔・具志堅太一・嘉数健悟・佐藤正伸・砂川龍馬・喜屋武亨. (2019). 小学校高学年体育授業における「ほめ合い」が運動意欲に及ぼす影響－ハードル走と走り幅跳びの混合種目を対象としたミックスドメソッドによる分析から－ 教育学部紀要 (文教大学), 52, 185-197.
- 小島弥生. (2013). 相手と状況がほめ言葉の受けとめ方に与える影響 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 13, 83-96.
- 近藤龍彰. (2017). 幼児期における友達関係の発達の变化：やりとりの頻度と相手に着目して 心理科学, 38, 25-37.
- 古関勝則. (2007). ほめ方・しかり方 Q & A <教師編> 児童心理, 61, 393-398.
- 待鳥美奈. (2018). ソーシャルスキルトレーニングが小学生の対人関係スキルに及ぼす影響について 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 2, 220-232.
- 松永あけみ. (2011). 児童期における友人関係理解の発達の变化－小学1年生から3年生の縦断的作文の分析を通して－ 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 60, 215-221.

- 松島暢志・若狭かおり。(2020). 養育・保育におけるほめと叱り *和顔愛語(比治山大学短期大学部)*, 48, 1-7.
- 森岡育子・近松正孝・渡辺良子・山本真利子。(2011). ストレngthsアプローチにおける小学校教師の学級雰囲気に対する認識の変化 *久留米大学心理学研究*, 10, 72-76.
- 村上達也・櫻井茂男。(2014). 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討－児童用アタッチメント機能尺度を作成して－ *教育心理学研究*, 62, 24-37.
- 永井智。(2009). 小学生における援助要請意図－学校生活満足度, 悩みの経験, 抑うつとの関連－ *学校心理学研究*, 9, 17-24.
- 長山芳子・小林久美・松園美和・鈴木明子・赤崎真弓・西野祥子・中西雪夫・財津庸子・柳昌子。(2006). 児童・生徒の家庭生活における意思決定の背景(第1報)－被服購入にかかわる意識－ *日本家庭科教育学会誌*, 49, 93-103.
- 仲埜由希子。(2016). 過去の対人的経験が青年期のレジリエンスに与える影響 *心理臨床研究(京都女子大学大学院)*, 8, 25-35.
- Nelson, J. A. P., Caldarella, P., Young, K. R., & Webb, N. (2008). Using peer praise notes to increase the social involvement of withdrawn adolescents. *Teaching Exceptional Children*, 41, 6-13.
- 野中智則。(2008). 友達と響き合い, 自ら進んで実践できる子供の育成: 互いの考えや思いを認め合い, 自分たちの生活をよりよくなる活動の展開(特別活動) *小学校研究紀要(宇都宮大学)*, 41, 48-51.
- 野崎秀正。(2018). 大学生における「ほめ」の友人関係維持機能－「ほめ」の根拠の有無と関係の親密度の違いからの検討－ *日本心理学会第82回大会発表論文集*, 216.
- 岡田大爾・藤亀美紀。(2007). 対人関係改善エクササイズの実施によって得られた教師・生徒の意識変化 *広島国際学院大学研究報告*, 40, 39-47.
- 奥村一将。(2010). 栽培活動における意欲の高め方についての一考察 *生活科・総合的学習研究(愛知教育大学)*, 8, 119-128.
- 坂本暁美。(2013). 協同学習を取り入れたピアノ実技指導の学習効果 *四天王寺大学紀要*, 56, 153-163.
- 佐々木正輝・菅原正和。(2009). 小学校における学校心理学的援助の方法と構成的グループエンカウンター(SGE)の有効性 *岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 8, 107-117.
- 関崎博紀・金庚芬・趙海城。(2017). ほめの対象に働く価値観の日韓中比較－大学生へのアンケート調査の結果に対する因子分析を通して－ *社会言語科学*, 20, 161-175.
- 鹿田祐子。(1998). 自分や友だちのよさを認め合い, できるだけ主体的に生活を楽しむクラスをめざして～大好きな音楽を生かしたクラスづくり～ *研究紀要(鳥取大学教育学部)*, 17, 93-96.
- Skinner, C. H., Neddrenriep, C. E., Robinson, S. L. Ervin, R., & Jones, K. (2002). Altering educational environments through positive peer reporting: Prevention and remediation of social problems associated with behavior disorders. *Psychology in the Schools*, 39, 191-202.
- 高橋隆二。(2015). なりたい自分の姿を生徒がイメージして主体的に取り組む特別活動の指導と評価の工夫－中学校版「特活力テスト」の開発と活用を通して－ *群馬県総合教育センター長期研修員報告書(平成26年度版)*
- 竹内彩乃・遠藤誠・志藤靉・大橋祐亮・佐々木来望・安川禎亮。(2019). 教職大学院における学びの深化－理論と実践を結び付けるストレートマスター－ *北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要: 教職大学院研究紀要*, 9, 41-58.
- 田村修一。(2015). 小学校における「いじめ」の被害者・傍観者の被援助志向性 *日本教育工学会論文誌*, 39, 33-36.
- Teerlink, E. Caldarella, P., Anderson, D. H., Richardson, M. J., & Guzman, E. G. (2017). Addressing problem behavior at recess using peer praise notes. *Journal of Positive Behavior Interventions*, 19, 115-126.
- 月原康雄。(1999). 自分のよさや可能性を生かし, 友達と共に活動できる子供の育成－1年生の当番・係活動の指導実践を通して－ *初等教育資料*, 702, 220-228.
- 渡邊賢二・藤井美成。(2020). 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連 *皇學館大学紀要*, 58, 208-194.
- 渡辺舞。(2010). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究－回想的面接調査による探索的検討－ *北星学園大学大学院論集*, 1, 71-83.
- 八越忍・永井智・濱口佳和。(2010). 小学校高学年における愛着対象に関する検討－ソーシャルサポートとコンボイ・モデルの観点から－ *筑波大学心理学研究*, 40, 83-90.
- 山上眞佐枝。(2007). 友達のよさから学ぶ音楽学習 *学習研究(奈良女子大学)*, 429, 10-15.
- 山室光生・小野はぎ・草野晶子・中窪寿弥。(2006). 自閉的傾向を示す子にとっての生活表現の意味と授業展開の工夫－図工科における塑像表現活動を通して－ *教育実践総合センター研究紀要(奈良教育大学)*, 15, 189-199.
- 矢野正一・佐伯優斗。(2018). 友達の良さを見つけ伝え合いながら共に成長する子どもの育成－小学校3年生体育科「忍者屋敷でクルリンパ!」の実践を通して－ *実践学校教育研究(大阪教育大学)*, 20, 55-62.
- 吉村真理子・上田和美。(2017). 構成的グループエンカウンター活用を試み～子どもたちが互いの良さを認め合う保育～ *千葉敬愛短期大学紀要*, 39, 205-213.

Zigler, E., & Kanzer, P. (1962). The effectiveness of two classes of verbal reinforcers on the performance of middle- and lower-class children. *Journal of Personality, 33*, 157-163.